安部健夫博士略歴

明治三十六年十二月十五日　三段崎本藏の貳男として山形縣米澤市に生る。母とら。

明治四十三年三月二十三日　安部家に入る。養父仁兵衛、養母よし。

大正十三年三月　旅順中學卒業。

同年四月　第三高等學校文科甲類入學。

大正十三年三月　卒業。

同年四月　京都帝國大學農學部農林經濟學科入學。

大正十四年三月　退學。

同年四月　京都帝國大學文學部史學科入學。

昭和三年三月三十日　京都帝國大學文學部史學科卒業（東洋史學專攻）。卒業論文「回鶻五城考」。

同年三月三十一日　京都帝國大學文學部副手を囑託せらる。

同年五月三日　京都帝國大學大學院入學。

同年五月十七日　京都帝國大學文學部囑託を解かる。

昭和四年五月一日　東方文化學院京都研究所助手に任ぜらる。

昭和五年八月三十一日　東方文化學院京都研究所助手を免ぜられ、東方文化學院京都研究所研究員を囑託せらる。

昭和八年五月十日　京都帝國大學大學院退學。

昭和九年三月三十一日　東方文化學院京都研究所研究員囑託を解かる。

同年十二月十日　第三高等學校講師を囑託せらる。

昭和十年九月十八日　吉澤ていと結婚。

昭和十一年三月三十一日　第三高等學校講師囑託を解かれ、第三高等學校教授に任ぜらる。

昭和十二年五月八日　長男勳夫生る。

昭和十三年三月三十一日　京都帝國大學文學部講師を囑託せらる。

昭和十四年一月三十日　東方文化學院京都研究所研究員を囑託せらる。

同年八月二十四日　長女玖美子生る。

昭和十五年三月三十日　京都帝國大學助教授に任ぜられ、人文科學研究所所員に補せらる。

同年九月十一日　貳女瑳知子生る。

昭和十六年十二月五日　參女千鶴子生る。

昭和十七年六月三十日　滿洲國へ出張を命ぜられ、七月八日出發す。
同年八月二十七日　貳女瑳知子死す。
昭和十八年八月六日　滿洲國より歸國す。
同年九月十二日　參女千鶴子死す。
昭和二十一年七月九日　京都大學教授に任ぜられ、人文科學研究所勤務を命ぜらる。
同年九月三十日　人文科學研究所所長に補せらる。
昭和二十四年十月一日　人文科學研究所所長を免ぜらる。
昭和二十九年四月一日　京都大學大學院文學研究科の授業擔當を命ぜらる。
昭和三十二年七月二十六日「西ウイグル國史の研究」により、文學博士の學位を授けらる。
昭和三十四年二月二十日　逝去。從二位勳三等に叙せらる。
法號は寒月院竹林健夫居士。
昭和三十四年五月三十一日　京都嵯峨清凉寺に葬る。

安部博士著作目錄

著書

書名	發行所	發行年月
西ウィグル國史の研究	彙文堂書店	昭和三十年三月
中國人の天下觀念 ―政治思想史的試論―	ハーバード・燕京・同志社東方文化講座委員會	昭和三十一年四月

論文

題目	掲載雜誌書	發行年月
生熟券支給制度略考	桑原博士還曆記念東洋史論叢	昭和六年一月
大元通制解說 ―新刊本「通制條格」の紹介に代へて―	東方學報京都 一	昭和六年三月
元史刑法志と「元律」との關係に就いて	東方學報京都 二	昭和六年十一月
元代「投下」の語源考	東洋史研究 三ノ六	昭和十三年九月

八旗滿洲ニルの研究(一)(二)　東亞人文學報 一ノ四 二ノ二　昭和十七年二月・七月

清朝と華夷思想　人文科學 一ノ三　昭和二十一年十二月

清代に於ける典當業の趨勢　羽田博士頌壽記念 東洋史論叢　昭和二十五年十一月

八旗滿洲ニルの研究 ―とくに天命初期のニルにおける上部人的構造―甲士の篇　東方學報 京都二十　昭和二十六年三月

清　中國史學入門　昭和二十六年十一月

元時代の包銀制の考究　東方學報 京都二十四　昭和二十九年二月

羽田博士とウイグル研究　東方學 十一　昭和三十年十月

米穀需給の研究 ―『雍正史』の一章としてみた―　東洋史研究 十五ノ四　昭和三十二年三月

耗羨提解の研究 ―『雍正史』の一章としてみた―　東洋史研究 十六ノ四　昭和三十三年三月

續元典章札記三則　石濱先生古稀記念 東洋學論叢　昭和三十三年十一月

元代知識人と科學(遺稿)　史林 四十二ノ六　昭和三十四年十一月

歐文著作

Where was the Capital of the West Uighurs? Silver Jubilee Volume of the Zinbun-kagaku-Kenkyūsyo Kyōto University, Kyōto, 1954.